

令和4年度学位記授与式 学長式辞

愛媛大学長 仁科 弘重

換気のために開けた窓からの外気にあまり寒さを感じなくなり、晴天の日には暑さも感じるようになってきました。新型コロナウイルス感染症はまだ完全には収束していませんが、春の訪れを感じる中で、学部卒業生、大学院修了生が一堂に会した学位記授与式を挙行できますこと、大変嬉しく思います。

ご卒業、ご修了、おめでとうございます。心から、お祝いを申し上げます。

卒業生、修了生のご家族、関係の皆様には、別室で、この会場の様子をご覧いただいております。保護者の皆様には、お子様のご卒業、ご修了をお喜び申し上げますとともに、これまで本学に賜りましたご支援に対しまして、この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

また、ご来賓として、愛媛県の田中副知事、愛媛大学校友会の高橋会長、愛媛大学経営協議会の委員の方々にご臨席いただいております。厚く、御礼申し上げます。

本日のマスクの着用については、国の方針として「晴れの日での式典では、マスクを付けないことを基本とする」との考えが示されましたが、學術の府である大学の学位記授与式では、できるだけ論理的に対応策を考えたいと思い、

マスクの着用は感染防止に一定の効果があること、

発話しない状態では、マスクを着用しなくても感染の可能性は低いこと

を科学的根拠とし、

県民文化会館内では原則としてマスクを着用していただき、

式典の間（あいだ）はマスクを外しても構いません

という形にさせていただきました。

この佳き日にあたり、ただいま、1782名の学部卒業生に、また、378名の大学院修了生にそれぞれの学位記を授与させていただきました。学部卒業生の多くは、実社会へと羽ばたかれることと思いますが、本学で修得した汎用的能力や専門的知識・技術を活かし、それぞれの進路において大いに力を発揮してくれることを願っています。大学院修了生は、それぞれの學術領域で、真理の解明に繋がる基礎的研究や、社会実装にも繋がる応用的研究を進められてきたと思いますが、今後は、研究者、技術者、専門家として活躍いただくこと

を願っています。

ここにいらっしゃる卒業生、修了生は、このコロナ禍の3年間、特に、その3年間のうちの始めの2年間は、本来の大学生活を送れなかったと思います。3年前に遠隔授業が始まり、コロナウイルスの変異株による「波」が来る度に、遠隔授業の割合が多くなり、また、サークル活動も制限させていただきました。大学・大学院生活のかなりの期間が不本意な生活となり、大変残念に思われていることと思います。

大変つらい体験をした方もいらっしゃると思いますので、単純に「コロナ禍での経験を活かしてください」と言いにくい状況ですが、「この3年間、人々は危機的な状況の中でどのように行動し、また、自分は苦しい状況をどのような工夫で切り抜けたか」などを思い出し、皆さんの社会的な洞察力、対応力の幅と厚みを増していただければと思います。

いまでも、新型コロナウイルスに感染する可能性がゼロになった訳ではありませんので、4月以降も、それぞれの状況における対応策をご自身で判断し、健康に過ごされることを祈念させていただきます。

さて、愛媛県の毎年の出生数（しゅっしょうすう）は、卒業生の皆さんが生まれた2000年は13207人であったのに対し、2020年は8102人で、20年間で61%になりました。この出生数の減少とも連動しますが、愛媛県の人口は、2020年が134万人であったのに対し、2040年には106万人、そして、2060年には78万人になると予想されています。

今後は、わが国だけではなく、多くの国々で、人口が減っていきます。人口が減っても、いまと同じような社会システムや経済活動を維持できるのか？人類全体に突きつけられた大きな問題です。

一方、デジタル技術の進展には、目を見張るものがあります。ロボットは、以前から工場などには導入されていましたが、最近では、人型ロボット、人型労働ロボットを目にするようになりました。また、車の運転も、完全自動運転に近づいています。これらによって、これまで人間が行っていた仕事の一部を、デジタル技術やロボットが代行してくれるようになります。

問題は、オフィスでの仕事についてで、これも、AIの守備範囲に入りつつあります。私たちが日常的に使っているアプリケーションにも、AIの機能が搭載され、これまで私たちが何時間も掛かっていた文書、グラフ、図の作成を、AIが瞬時にしてくれるという状況が近づいています。

私たち人類には、知的創造性があります。変化しつつある社会や状況に応じて、新たな方法やシステムを考え、創り出すことができます。しかし、働いている人々の多くは、必ずしも創造的な仕事をしているわけではなく、あまり考えることもなく、ほぼ同じ仕事を繰り返していることが多いのも事実です。

今後、人口が減っていく中で、私たちの仕事は、「創造性をあまり必要としない繰り返しの仕事」はAIやロボットに任せ、私たちは「より創造的な、生産性の高い仕事」に集中する必要があります。そこでは、「作業を正確にする」ことが評価されるのではなく、「その時の社会や状況に応じた新たな方法やシステムを生み出す」ことが評価、期待されると思います。その期待に応えていくためにも、私たちは、日々、自分自身を更新、すなわち、アップデートしていく努力が必要です。

いずれ、ロボット、AI、私たち人間、の間の、適切な役割分担によって、現在よりも「私たち人間が豊かさを感じられるような社会」が実現することを期待したいと思います。

最近は、「縮小社会」という言葉もよく聞きます。人口減少の結果として、生産に従事する人が減ることから生産量、供給量が減りますし、消費する人が少なくなることから消費量も減ることになります。私は、いわゆる高度経済成長といわれる時代に育ちました。いつも、さまざまな量が毎年増えていましたし、「また、来年も、増えるのだろう」という希望的、楽観的な考えでした。

時代は変わり、皆さんが社会に出る時は、「縮小社会」です。ただ、私は、皆さんに悲観的になって欲しいと言っているわけではありません。人口が減れば、ひとり1人の人間の「大切さ」、そして「期待」は、大きくなります。皆さんひとり1人が、自分の出番で、創造性を大いに発揮して欲しいと思います。

皆さんが生きるこれからの時代は、私が成長した時代とは比べられないほどのアドバンテージも持っています。

先ほども述べたデジタル技術については、ネットワークによって空間的距離がなくなりました。また、生命科学。このコロナ禍が20年前に起こっていたら、どうなったか、考えてみてください。生命科学の進歩で、m-RNAワクチンができたからこそ、この程度で済んでいます。人間が豊かさを感じられる社会を構築するのに役立つような科学技術は、とても多くあります。科学技術を有効に活用することも、創造性に繋がります。

さて、愛媛大学を巣立たれる皆さんが、母校のことを心配されることがない

ように、今後の愛媛大学のことを少し話させていただきます。

愛媛大学は、今後のビジョンとして、“Challenge for Intelligent Ecosystem University”をスローガンとしたいと考えています。Intelligentは、知的、知能的という意味です。

“Ecosystem”は、元々（もともと）「生態系」という意味です。生態系では、植物、動物、微生物、そして私たち人間が、物質やエネルギーを循環させながら共存している状態です。

この生態系と同じように、「大学、学生、地域コミュニティ、企業、自治体などの間で、大学の知的活動である研究・技術開発や人材育成、そして、これらの成果である知的財産や資金を循環させながら、地域全体を発展させていく」。このような、地域の知的循環システムの中心を担える（になえる）大学に変わりたいと考えています。

このような大学では、大学に来られるのは、皆さんのような若い大学生だけではありません。地域や企業や自治体などの人たちが、大学との共同研究や、大学での学び、すなわち自分自身のアップデートのために来られるようになります。後者は、いわゆる、社会人リカレント教育、リスキリングです。

皆さんは、いま、20代（にじゅうだい）の前半です。これからの人生は、60年以上あります。大学を卒業、修了して、「これで、学びは終わり」ではありません。これからの人生で、転職や起業をする人も、また、人生に悩み、迷う人もいると思います。その時は、再度「学ぶ」ために、愛媛大学に来てください。

最後に、皆さんが、愛媛大学の卒業生、修了生としての誇りを持ち、これからの変化、変容が大きい社会の中で、豊かな創造性を発揮し、活躍されることを心から祈念し、私からの式辞といたします。

本日は、ご卒業、ご修了、おめでとうございます。